

沖縄地理学会会報 ● 第 67 号

2018 年 1 月 18 日発行



編集・発行 沖縄地理学会 © 発行人 小川 護
 OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)
 事務局 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
 琉球大学法文学部地理学教室内 廣瀬 孝研究室気付
 電話 098-895-8191 eメール info@okinawachiri.sakura.ne.jp
 ホームページ <http://www.okinawachiri.sakura.ne.jp/index.html>
 郵便振込口座 02040-4-4697 (加入者名：沖縄地理学会)

2017 年度 沖縄地理学会大会・総会（報告）

2017 年度沖縄地理学会大会・総会を、2017 年 7 月 29 日（土）、琉球大学で開催しました。大会では、つぎのとおり、研究発表のほか、第 10 回地理教育シンポジウムを開催しました。次ページ以降に、研究発表要旨、シンポジウム要旨、総会報告を掲載します。

● 研究発表

口頭発表（10:00～11:50）

座長：上江洲 薫（沖縄国際大学）

卯田卓矢（名桜大学）：観光ボランティアガイド活動における「高齢化」の意味と実践 — 今帰仁グスクを学ぶ会を事例として—

堀本雅章（法政大学沖縄文化研究所）：鳩間島の親島は西表島か否か — 住民の日常生活空間と、西表島との架橋の賛否に着目して—
 小川 護（沖縄国際大学）：東京都大田市場における切葉生産の産地間競争

座長：渡久地 健（琉球大学）

渡邊康志（GIS 沖縄研究室）・上原 富二男（沖縄大学名誉教授）：1948 年沖縄島地形復原 DEM 作成について

目崎茂和（三重大学名誉教授）：ラパヌイ（イースター島）の地形とモアイ像

ポスター発表 概要説明（11:50～11:52）コアタイム（11:52～12:15）

廣瀬 孝（琉球大学）・當山紘加（豊見城市）・重松 百之香（北海道三笠地域おこし協力隊）：沖縄におけるクールアイランド — 末吉公園と小禄金城公園での観測結果—

● 総会（12:15～13:00）

● 第 10 回地理教育シンポジウム「教員養成と地理学」（14:00～17:00）

会長あいさつ：小川 護（沖縄国際大学）

シンポジウム趣旨説明：崎浜 靖（沖縄国際大学）

基調講演：我那覇 念（沖縄地理学会会員）：「地理」の授業力

パネリスト講演：

神山 英（コザ小学校）：小学校地理教育の実践報告 — 地域を学ぶ・地域で学ぶ—

コメント：花木宏直（琉球大学）

中村謙太（琉球大学附属中学校）：深い学びを実現するための思考力を育成する地理の授業づくりの試み — 社会的な見方・考え方の深め合いを通じて—

コメント：宮内久光（琉球大学）

山田義尚（与勝高校）：「中学校・高校」を見渡した地理教育の現状と身近な例について

コメント：上原 富二男（沖縄大学名誉教授）

総合討論 司会：崎浜 靖（沖縄国際大学）

司会：上江洲 薫（沖縄国際大学）

2017 年度 沖縄地理学会大会・研究発表要旨

観光ボランティアガイド活動における「高齢化」の意味と実践 —今帰仁グスクを学ぶ会を事例として—

卯田 卓矢（名桜大学）

近年の学習型観光の高まりの中、旅行者に地域の資源を紹介し、「学び」を促す仕組みとして観光ボランティアガイド活動がある。ガイド組織は2000年以降増加し、現在全国に約1,700の組織が存在している。しかし、組織の中には設立したものの十分な活動ができず、休止あるいは解散するものも少なくない。その理由としてガイドの高齢化と後継者育成の問題がある。ガイドは活動の性格上、定年退職者が多くを占めるが、高齢のガイドは加齢による体力低下のため活動継続が困難である。そのため、若い担い手の育成が急務とされる。しかし、高齢者の中には長期間活動を続けている者も存在する。こうした高齢者は従来のネガティブな高齢者イメージに再考を促す点で重要である。また、既往研究ではガイドの高齢化を問題視する一方で、高齢ガイドの活動実態についてはあまり言及していない。つまり、高齢化が問題とされつつも、実際に高齢者はどのように活動しているのかについては十分に検討されていない。そこで、本発表では今帰仁グスクを学ぶ会を事例

に、高齢ガイドの活動実態と継続的な活動の要因を分析し、高齢者によるガイド活動の可能性について考察する。

学ぶ会は今帰仁村がガイド養成講座を開講したことを機に受講者有志により創設された。現在の会員数は約40人、平均年齢は約65歳である。ガイドは学ぶ会創設当初からの参加が多く、ガイド歴8～10年と継続的に活動する者が目立つ。聞き取りによると、加齢による影響として足腰の負担や案内後の疲労がある。会員はこれらに対し、案内中の休憩や木陰での説明などの対策を行っている。また、学ぶ会では会員への向学心醸成のために見学会や研修などの学習機会を積極的に設けている。

以上から、高齢ガイドの継続的な活動には、会員自身による加齢への対策と組織の支援の2点が重要であることが示唆される。ガイド組織を維持するためには、学ぶ会のように高齢者自身が活動を継続し、高齢者間で世代交代ができるような仕組みづくりが求められるだろう。

鳩間島の親島は西表島か否か —住民の日常生活空間と、西表島との架橋の賛否に着目して—

堀本 雅章（法政大学沖縄文化研究所）

鳩間島は、石垣島から1時間弱で行くことができるが、時化で冬期は1週間船が欠航することが珍しくない。鳩間島から約5kmのところに西表島があり、現在鳩間島にはない売店、診療

所、歯科医院などがある。本研究の目的は、鳩間島の「親島」は距離的に近い西表島か否かを考察することである。調査は、2015年9月に、鳩間島を生活拠点としている全成人を対象に

実施し 40 人中、有効回答 35 (有効回答率 87.5%) を得た。

1 年間に島外へ行く回数については、10 回以上 30 回未満が 17 人で最も多い。島外への行先は、石垣島 30、沖縄本島および那覇市各 6、西表島 5、県外 4 回答である (複数回答有)。本項目に回答があった 31 人中 30 人が石垣島を挙げている一方、西表島は 5 回答のみである。この結果、鳩間島居住者は、西表島ではなく石垣島に目が向いていることが明らかである。西表島にも複数の売店や診療所はあるが、大型商店や専門医が揃っている病院はない。また、定期船は石垣島から鳩間島経由西表島 (上原)、または石垣島から西表島 (上原) 経由鳩間島間で運航されているが、波が荒れることが多い石垣島・鳩間島間の欠航と同時に、鳩間島・西表島

(上原) 間も欠航となる。よって、西表島は近距離に位置していても、定期船の運航率は石垣島と同じである。次に、島を出る目的は買物 21、仕事・出張・研修計 10、医療機関 8、帰省 7、行事 5、冠婚葬祭 4、用事 3、家族に会う 2、旅行および役場が各 1 回答である (複数回答有)。

また、筆者は既に鳩間島と西表島との架橋の必要性の有無について調査を実施し、2015 年の調査では 62.5% の回答者が架橋は不要と考えている。架橋によるメリットより、環境の悪化や宿泊客の減少を懸念し不要と考える人が多いからである。これらのことから、鳩間島の親島は距離的に近い西表島ではなく、実質的な親島は石垣島であることが明らかになった。

東京都大田市場における切葉生産の産地間競争

小川 護 (沖縄国際大学)

沖縄県は 1972 年の本土復帰以降、臨空産地型の花弁産地として、小ギクを中心に産地化を進めてきた。一方、亜熱帯気候を利用して、古くから切葉 (葉物) 生産も盛んである。そこで、本研究では、わが国最大の花卉市場である東京都大田市場における切葉 (葉物) 入荷額のデータを中心に産地間競争の一端を明らかにすることを目的とした。データとしては、切葉全体の都道府県別の入荷額データのほか、切葉 (葉物) として比較的需要が高い、ロベレニーフェニックス、ドラセナ、タマシダの三種類の切葉 (葉物) を中心に 2016 年のデータを用いて分析を進めた。

ところで、わが国における切葉生産は、温暖な気候を活用した、東京都八丈島、沖縄本島、鹿児島県指宿市、静岡県西部などがあげられる。

それらの大田市場における切葉の品種別入荷状況をみると、ロベレニーの場合には、それらの入荷は八丈島のものが寡占的状況にある。しかもロベレニーの場合には八丈島の古くからの特産品であり「鉢物を育成しながら切り葉も取る」という高収益な生産方式で、長く主力の座を占めてきた。しかし、近年では長引く不況の影響で観葉鉢物の販売不振が深刻となり、切り葉も含めたロベレニーへの生産意欲は低下し、手入りの行き届かない圃場の増加等が問題となってきた。そこで、切り葉・切り花の品質向上、出荷量増加をめざし、共撰共販体制の強化、新品目の導入を 2006 年度から 5 年間の基本計画で普及し、功を奏したと考えられる。

一方、ドラセナの入荷状況は、3 億 1,200 万円で、そのうち沖縄県産のものが 14% (4,220

万円), マレーシア産 (カメロンハイランド) のものが 3,400 万円で 11%を占めており, 両者において産地間競争がみられる。のこり 72%(2 億 2,000 万円)はその他海外産である。沖縄県産のそれは, 恩納村, 名護市が中心産地となっている。とくに, 恩納村の場合には, 1974 年に名古屋市場のすすめにより, ドラセナの鉢物におけるリレー栽培を開始したのが最初である。その後, 県内の緑化推進とあいまって, 瀬良垣緑化木生産組合, 亀の浜観葉植物生産組合が組織され, 1981 年には集荷場が設置された。それらの鉢物のドラセナ普及とあいまって, JA が中心になって切歯のドラセナ栽培が普及し産地化が進められている。現在の中心産地は

喜瀬武原地区であり, 生産農家の多くはキク栽培との兼業である。

また, タマシダの年間入荷状況は 760 万円である。そのうち, 沖縄県産のものが 390 万円 (52%), 東京都 (八丈島) のものが 340 万円で 45%近くを占める。入荷状況におけるすみわけが進み, 1~5 月は沖縄県産, それ以外の月別入荷は東京都 (八丈島) のものとなっている。沖縄県におけるタマシダの生産地は金武町である。ここでは, 2000 年以降, 沖縄県金武町中川地区における経営構造対策事業取り組みや少量花材安定供給体制構築支援事業などにより, タマシダの切葉生産が導入されたことが大きいと思われる。

1948 年沖縄島地形復原 DEM 作成について

渡邊 康志 (GIS 沖縄研究室)・上原 富二男 (沖縄大学名誉教授)

『1948 年米軍作成, 1/4800 地形図』は, 大縮尺の上に, 5 フィート (約 1.5 m) 等高線で地形を精密に表現していることが知られています。これらを使い, 渡邊他 (沖縄地理 2014, <http://okinawa-repo.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/okinawa/17794>) は, 那覇, 浦添, 宜野湾周辺の約 5 m サイズグリッド標高 (DEM) を効率的に生成することに成功し, 同地域の 1948 年当時の地形を復元しました。

ご存知の通り, 戦後米軍基地の建設や, その後の中南部の人口増による宅地開発や農地造成などの大規模な地形改変を伴う開発によって, これらの地形は失われてしまいました。これらの状況は 1945 年前後の空中写真 (沖縄戦デジタルアーカイブの背景図) と現在の衛星画像を比較するとわかります (<http://www.gis-okinawa.jp/Geomashup.html>)。また, 渡邊他 (2014) は, 現在の地形情報であ

る国土地理院 5 m メッシュ標高データとの差分より, 『盛土・切土分布図』という形で地形改変状況を表し, 地形改変が同地域の全域に及ぶことを明らかにしました。

一方, 沖縄の亜熱帯気候と島尻泥岩や琉球石灰岩が作り出す独特な地形は, 復帰前より琉球大学や本土大学の多くの地形学者や地質学者により研究されてきました。しかし, これらの研究者も大学等を去る時期を迎え, 現物 (地形) を失った状態では新たな研究も考え難く, 沖縄にあった様々な地形が忘れ去られてしまう危機すら感じてしまいます。そこで, 沖縄島中南部全域の 1/4800 地形図から地形改変以前の詳細地形を DEM として復元し, デジタルマップや 3D ビューとして公開する決意をしました。

1/4800 地形図の平面図としての公開は, 上原富二男先生所有地形図のデジタル化により, GIS 沖縄研究室 web サイト

(<http://www.gis-okinawa.jp/Geomashup.html>) や 埼玉大学谷先生の『今昔マップ (web 版)』にて、現在の地形図と比較しながら閲覧できるようになっています。

今回は、199 枚存在する 1/4800 地形図の等高線を全てベクトル化し、グリッド標高を作成する予定です。現在のところ、渡邊他 (2014) で 38 枚、他事業で 4 枚が作成済みで、7 月 7 日現在、32 枚処理が完了していて、約 40% を作成したことになります。

これらの標高データをデジタル情報化することで、3D 表示することが可能になります。等高線を使った地形表現を理解することが難しい学生や一般の方々にも理解できるデータとなると思います。また、陰影図や傾斜、凹凸を表す開度など様々な地形計量値を可視化することで、新しい知見を得る可能性もあります。

渡邊他 (2014) の『盛土・切土分布図』の作成範囲を拡大し、防災等に役立てることも可能になります。

第 1 段として、作成済みのデータを 3D ビューにて公開しています。これは、国土地理院の地理院地図の 3D 表示スクリプトを利用し、自由な方向から立体地図を眺められるようにしたものです。PC 以外にもスマホやタブレットでも利用できる優れ物です。

整備済みの範囲を示すインデックスマップは、GIS 沖縄研究室 web サイト http://www.gis-okinawa.jp/2016/ams48_3D/MapGrid.htm にて、ご覧いただけます。みたい場所をクリックすることで 3D ビューを利用できます。今後、この作業を進めますので、先ずは完成したものからご覧いただければ幸いです。

● ラパヌイ (イースター島) の地形とモアイ像

目崎 茂和 (三重大大学名誉教授)

南太平洋の西端にある南米チリ領の孤島イースター島は、現地語名はラパ・ヌイ (ラパ・ヌイ語: Rapa Nui) 「広い大地」の意味である。正式名はパスクア島 (スペイン語: Isla de Pascua) と言い、“Pascua” はスペイン語で復活祭 (イースター) を意味するので、英語名の由来となる。全周 60 km, 面積 180 km², 年間降水 1250 mm, バナナやサトウキビ栽培が盛んである。島全域が、モアイ像があることで有名なラパ・ヌイ国立公園で、1995 年世界遺産に登録され、世界的な観光地となっている。2016 年 2 月に、南極からの波浪で、舳での上陸ができず、3 日間沖泊を余儀なくされ、1 日だけ上陸し観光できた。島への入場費は、日本円で 8,000 円であった。

三角形をした島の各頂点には、カウ山、カテ

ィキ山、テレバカ山の 3 火山があり、テレバカ山 (海拔 507 m, 海底から約 2,000 m 高) が島の大部分を占め、他の 2 つの他に多数の噴火口や火口湖がある。ガラパゴス諸島やハワイ諸島と同じ玄武岩で鉄分が多く 75 万年前に形成され、最新の噴火は約 10 万年前、20 世紀前半に水蒸気の噴出した記録がある。

モアイ像の採石の中心は、「ラノ・ララク山」で、直径約 550 m の凝灰岩の噴火口跡で、玄武岩や黒曜石の石斧で作成され、作成過程、運搬途中の像も現存している。モアイ像は 1000 余り現存するが、歴史的には 7~8 世紀頃にアフ (石の祭壇) が作られて、10 世紀までにモアイが建造された、孤立して外敵の脅威がなく、加工しやすい凝灰岩が大量にあったためであった。古く 1 期には人の姿に近く下半身もあり、

2 期には下半身がなく細い手をお腹に組む, 3 期には頭上に赤色凝灰岩でブカオ(髪飾り)を乗せるようになり, 4 期に一般的特徴の長い顔,

狭い額, 長い鼻, くぼんだ眼, 伸びた耳, 尖った顎, 一文字の口と, デザインの変遷が知られている。

沖縄におけるクールアイランド —末吉公園と小禄金城公園での観測結果—

廣瀬 孝(琉球大学)・當山 紘加(豊見城市)・重松 百之香(北海道三笠地域おこし協力隊)

本研究では, 沖縄における公園緑地のクールアイランドの実態を探る目的で, 緑地規模の異なる 2 つの公園において, 定点観測と移動観測による気温観測を実施した。緑地規模の大きな公園としては末吉公園(公園面積 18.76 ha)を, 規模が小さい公園としては小禄金城公園(2.0 ha)を対象とした。定点観測は, 緑地内および周辺市街地において, 地上約 1.5 m に温度ロガーを設置し, 10 分間隔での記録を行った。移動観測は, 温度ロガーと GPS を持って, 公園緑地内および周辺市街地を歩きながら気温と位置を記録して行った。全体の観測期間は, 2015 年 10 月 23 日~2017 年 4 月 2 日である。観測の結果, 沖縄の公園緑地でもクールアイラ

ンドがみられた。2015 年 10 月と 11 月の観測では, 公園緑地と周辺市街地の気温差であるクールアイランド強度は, 晴天日の夜間に大きくなり, また, 規模の大きい末吉公園の方が大きかった。近隣的那覇気象台における風(風速と風向)のデータとの関係を見ると, 風速が大きいとクールアイランド強度が小さくなり, また, 風向の影響が示唆された。季節変化をみる目的で行った 2016 年の小禄金城公園における観測では, クールアイランド強度は夏に大きく冬に小さかった。また, クールアイランド強度は夏には昼間に大きくなり(日射と正の相関), 冬では夜間に大きい(負の相関)という, 夏と冬では逆の関係がみられた。



口頭発表を行う渡邊康志氏(上段左), 目崎茂和氏(上段中央)とその発表聞く大会参加者(上段右), ポスター発表を行う廣瀬 孝氏(下段左)とその発表を聞いて質問する参加者(下段右)

第10回 地理教育シンポジウム 「教員養成と地理学」(報告)

崎浜 靖 (沖縄国際大学), 上江洲 薫 (沖縄国際大学)

近年、学校現場においては、小・中連携、中・高連携、高・大接続なる「教育改革」が進みつつあり、社会科・地理教育においても内容や方法をめぐって、大きく変わろうとしている。とりわけ大学入試改革におけるアクティブ・ラーニングの導入は、地理教育のみならず、これからの学校教育のあり方を大きく変えることも予想されている。

そこで、本シンポジウムでは、沖縄におけるこれからの地理教育の「学び」について議論する前提として、これまでの地理教育の「学び」を検証することを目的に、小・中・高校の学校現場の先生方の実践報告をもとに、教員養成の立場として、大学側からの意見も絡めて、今後の地理教育の方向性について検討を行った。

我那覇 念氏の基調講演では、教師が身に付ける必要がある力として、地図の活用能力、写真の読み取り、地理的情報の収集・作図・読み取り、地域調査の方法・分析などが必要であるとした。基調講演の後、小・中・高校の先生方によるパネリスト講演が行われた。

パネリストの神山 英氏は石垣市の小学校での地域調査(「町探検」)の取り組みを紹介した。その報告に対して、花木宏直氏(琉球大学教育学部)は子供が共同で調べる地理教育になっているとし、大学において思考や知識を定着できる人材育成やフィールドワークの重要性を述べるとともに、小学校で地域学習を必ず行うが、

大学でフィールドワークを行うのは社会科のみとなっている現状などをコメントした。

次に、パネリストの中村謙太氏(琉球大学附属中学校)はアクティブ・ラーニングの視点から学生が資料の内容を説明し合う地理授業の実践事例を提案・報告した。この報告に対して、宮内久光氏(琉球大学法文学部)は中学校の新指導要領が2017年に発表されたことを受けて、今回のシンポジウムの意義を強調した後、中学での主体的な取り組みは意義がある一方で、大学ではディスカッションの内容が地理でなく現代社会が中心であり、ディスカッションの内容設定などの難しさを述べると共に、大学での授業の進め方は参考になったとコメントした。

最後に、パネリストの山田義尚氏(与勝高等学校)は高校でタブレット等を使用した授業が少なく、授業内容の計画・実行を行うが、評価・改善まで進んでいないなどと報告した。この報告に対して、上原 富二男氏(沖縄大学名誉教授)は中学校で電子黒板が設置され、教育実習生も電子黒板を使用しているが、沖縄大学ではITC教育の設備がなく、地理関係の授業も減少し、巡検参加者も少なく、大学での地理教育は厳しい状況、高大連携の必要性もコメントした。

総合討論ではアクティブ・ラーニングの事例集、新学習指導要領に基づく授業内容、小規模校でのアクティブ・ラーニングの取り組み、大学への教員養成の要望などが討論された。



シンポジウムで基調講演を行う我那覇 念氏



シンポジウム会場の様子



左から、我那覇氏、パネリストの山田義尚氏、中村謙太氏、神山 英氏

「地理」の授業力

我那覇 念（沖縄地理学会会員）

社会で主知的に生きる人を育てるために、「地理」の授業においては児童生徒の地理的な見方・考え方を培う必要がある（高等学校学習指導要領地理歴史編など）。そのための「地理」の授業の在り方として、日常の教科書・地図帳・資料集などを使用した教師主導型の授業だけでなく、児童生徒の主体的な活動を促す作業的な学習内容や調べ学習を取り入れた授業が求められる。

日常の授業では、地図や統計資料・景観写真など多種多様な資料を児童生徒の地理的な見方・考え方を培うことに積極的に活かす取り組みを日常の授業の中で意識的に行うことが大切である。

作業的な学習では、主に地理的な技能の習得

や地図・統計グラフなどを読み取る力等を育くむ。調べ学習では、特に野外調査の場合、景観観察力（地理的事象発見力）、収集した資料の整理の仕方、分析・考察の仕方、表現方法などを、具体的に学習を通して児童生徒の地理的な見方や考え方を培うことを主なねらいとする。

「地理」の授業者は、児童生徒の学習上の多様なニーズに適切に応え、地理的な見方・考え方を培うために必要なことは何かを常に考え準備して授業を実践することが「地理」の授業力の向上につながると思う。

※「地理」とは、小学校社会科における地理的内容、中学校社会科地理的分野、高校地理 A・地理 B の総称。

小学校地理教育の実践報告 —地域を学ぶ・地域で学ぶ—

神山 英（コザ小学校）

2011 年、石垣市立川原小学校の 3 年生 2 人と私は、総合的な学習の時間を活用して「地域調査」を行いました。学校のまわりを歩いて、地域を学び（地域理解）・地域で学んだ（調査方法）記録をふり返りながら、地理教育の第一歩として何が大切なのか？

次の 4 点から、参加者と一緒に考える機会になればと思います。

①子どもたちは地域をどのように見ているのか？

学校のまわりの地図づくりを通して、子どもたちの地理的認識を確認しました。案外、子どもが見ている地域の姿は小さくせまいことに気づきました。

②生活と学校の学びが繋がった瞬間！

地図を使って地域調査へ。地図が読めない子や、地図を使うと見えてくること・見えなくなるなど、生活と学校の学びがつながる大切さを感じました。

③地域の変だな一さがし

地域を歩く子どものすごさに感動。見えるものだけでなく五感をフル回転させながら、積極的に地域へ関わる姿が見られました。

④つながり合う地域のひと・もの・こと

地域調査で感じたことや調べてきたことを地図へ。自動車の交通量、大きい道路・交差点、信号機・道路標識、お店など…2 人の気づきがつながるとき、地域の姿が少しずつ見えてきました。

● 深い学びを実現するための思考力を育成する地理の授業づくりの試み —社会的な見方・考え方の深め合いを通じて—

中村謙太（琉球大学附属中学校）

昨年 12 月に中央教育審議会は授業改善の視点「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニングの視点）について、その趣旨と活動の方向性を示した。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善に向けた取り組みを活性化していくことの重要性が言われている。本発表では、社会科地理的分野『南アメリカ州』の単元で「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し取り組んだ実践事例を報告する。本単元では主題を「開発と環境保全」とし、「ブラジルで熱帯林の開発を進めるべきか」という単元の中核となる問いをたてて追究する課題解決の授業をおこなった。課題追究の過程で、調べたことをグループ内で共有したり、課題に対する考えを話し合うなど、グループや学

級での対話の場面を意図的に設定することで、位置や空間的な広がりとの関わりや他地域との結びつき、人間の営みとの関連など、課題に対する多面的・多角的な視点の獲得し、地理的な見方・考え方を深め合うことで「深い学び」を実現することをめざした。また、単元の導入では知識構成型ジグソー法による協調学習をとりいれることで、単元の学習を主体的にし、単元で学んでほしい社会的な見方・考え方を大きくつかむことをめざした。授業後は、課題に対して多面的・多角的な視点から自分の意見をまとめている生徒が多くみられた一方で、より説得力のある形で説明するのには十分でないケースも見られるなどの課題も残った。

● 「中学校・高校」を見渡した地理教育の現状と身近な例について

山田義尚（与勝高校）

本校は県内初の併設型中高一貫高であり、中学校併設から今年度で 11 年目となる。

設立当初より大学進学ニーズ、特に国公立大学進学を求められ、創立 38 年目となる与勝高等学校には特進クラスが 2 クラス設置されている。1 学年 4 クラスと小規模でありながら幅広い進学実績も求められ、昨年は創立以来最高となる国公立 35 名の合格となった。

併設の緑が丘中学校は現在 ICT 教育の研究が進められ、生徒一人一人がタブレットを利用しながらの授業が可能となっている（導入は 1 年半ほど前）。これからの学習視点の中心である「主体的・対話的で深い学び」の授業実践の研究も進んでいる。先日行われた授業研究では、およそ中学 1 年生とは思えないスライドの作

成や意見交換を見ることができた。それぞれの考えをたやすく確認できることで、自分の考えを「深化」しやすくなっているようである。

一方、与勝高校においては、中学にあるような先進的な設備はほとんど無く、私自身においては、旧式の授業展開に終始することがまだ多い。小規模校であるが故に複数の科目を担当し、1 回きりの授業がほとんどなので、正直なところ PDCA サイクルの「PD」に終始しているのが現状である。可能な限り、生徒の思考の深化を目指した授業作りをしたいと常々考えているが、時間は有限であり困難を極める。最近取り組んだ例としては、「ハイサーグラフの作成と説明」はねらい通りいったのでは・・・としたい。

高校の地理教育は学校によってかなりの多

様化がみられる。生徒層が異なるので、それは仕方のないことであるが、生徒のニーズに合わせた、かつ進路先にも対応した、これから求め

られる「地理教育」には絶え間ない変化があると予想され、日々研鑽が必要である。

総会報告

総会は、小川 護会長による挨拶のあと、議長に卯田卓矢会員（名桜大学）を選出して議題が進められた。2016 年度事業報告（案）が花木宏直幹事（琉球大学）から、2016 年度決算（案）が廣瀬 孝幹事（琉球大学）から、それぞれ報告され、承認された。次いで、2017 年度事業計画（案）が花木幹事（琉球大学）から、2017 年度予算（案）が廣瀬幹事から説明され、承認された。

続いて、2017 年度学会表彰について、渡邊康志表彰委員会委員長から、2017 年度の選考結果の報告があり、全会一致で承認された。受賞者は以下のとおり（敬称略）。

論文賞：渡久地 健，藤田喜久，中井達郎，長谷川 均，高橋そよ。

また、堂前亮平氏，西川 治氏，前門 晃氏，目崎茂和氏が本会名誉会員に推薦され、全会一致で承認された。

以下に、2016 年度事業報告，2017 年度事業計画，2017 年度学会表彰の推薦書，名誉会員の推薦文を掲載し、総会報告とする。

● 2016 年度事業報告

1. 沖縄地理学会大会・総会

2016 年 7 月 30 日（土），沖縄国際大学 3 号館 202 教室および 2 階ラウンジにて，参加者：50 人

1) 研究発表（9：30～12：30）

口頭発表 7 件，ポスター発表 2 件

2) 総会（12：30～13：15）

3) 第 3 回石灰岩地域シンポジウム（14：00～17：00）

テーマ：「沖縄島中部石灰岩地域の地理的価値を考える」

会長挨拶：前門 晃（沖縄地理学会会長）

<基調講演>

府本 禮司（沖縄地理学会会員）：現在に至る土地利用の変遷に関する一考察—土地利用計画等の作製の現場から—

<パネリスト講演>

前門 晃（琉球大学）：沖縄島中部石灰岩地域における地形特性

<コメント>

我那覇 念（沖縄地理学会会員）

上原 富二男（沖縄大学）：沖縄島中南部の琉球石灰岩台地における泉からみた水環境

<コメント>

廣瀬 孝（琉球大学）

仲田 栄二（沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員）：沖縄島・中南部における石灰岩域の植生

<コメント>

渡久地 健（琉球大学）

<総合討論>（16：20～17：00）

司会：小川 護（沖縄国際大学）

2. 懇親会

2016 年 7 月 30 日（土）18：00～20：00，ばいかじ沖国大前店，参加者 20 名

3. 『沖縄地理』

第 17 号（2017 年 6 月 29 日発行）

4. 「沖縄地理学会会報」

第 65 号（2016 年 12 月 31 日発行），第 66 号（2017 年 6 月 30 日発行）

5. 評議員会

2016 年 7 月 22 日（金）18：30～20：30，琉

球大学法文学部研究棟 211 教室 (地理学実験室) で開催

6. 幹事会

2 ヶ月に 1 回の割合で、琉球大法文学部研究棟 209 教室で開催

7. 沖縄地理学会表彰

<論文賞>

・青木 久, 武石 裕, 前門 晃

<奨励賞>

・新垣 夏実, 前門 晃, 青木 久

・大城 和也, 廣瀬 孝

<ポスター賞>

・吉國 耀太, 青木 久, 前門 晃

● 2017 年度事業計画

1. 沖縄地理学会大会・総会

2017 年 7 月 29 日 (土) 琉球大学教育学部棟 1 階 104 教室

1) 研究発表 (10 : 00~12:15)

2) 総会 (12 : 15~13:00)

3) 第 10 回地理教育シンポジウム (14 : 00~17 : 00)

テーマ : 「教員養成と地理学」

2. 懇親会

2017 年 7 月 29 日 (土), 18 : 00~20:30, ぱいかじ沖国大前店

3. 『沖縄地理』

第 18 号の発行

4. 「沖縄地理学会会報」

第 67 号, 第 68 号 の発行

5. 評議員会

2017 年 7 月 21 日 (金) 18 : 30~, 琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室で開催

6. 例会

募集中

7. 県内巡検

募集中

8. 幹事会

2 ヶ月に 1 回の割合で、琉球大学法文学部研究棟 209 教室で開催

9. 沖縄地理学会表彰

総会で決定する

● 沖縄地理学会表彰理由 (授与理由)

沖縄地理学会論文賞

<対象論文>

渡久地健・藤田喜久・中井達郎・長谷川均・

高橋そよ (2016) : 礁前面の凹地「カタマ」の漁場としての生物地形学的評価。沖縄地理, 第 16 号, 1-18。

本論文は, 中琉球の漁師たちが「カタマ」「ハタマ」「ハターマ」などと呼んでいる, 礁嶺 (リーフ) の外海側の緩斜面に位置する凹地 (以下, 「カタマ系」という) の全体像を把握し, 「漁場」としての生物地形学的評価を試みた意欲的な論文である。奄美・沖縄に関する地域誌・民俗誌を渉猟し, カタマ系の地理的分布を明らかにしたうえで, 奄美大島大和村においてカタマ系の地形・底質・生物の調査を綿密に行っている。さらに漁師からの漁撈活動に関する聞き取り調査による詳細な情報を重ね合わせることで, 「地形—底質—生物—漁撈」の関係性の内実が明らかにされている。

本論文は, サンゴ礁と方名との複雑な関係を, 漁師の「伝統知」に裏打ちされた空間認識からひも解き, オリジナリティーの高い内容に仕上がっている。これからの「自然と人間」, 「関係の科学」としての地理学の可能性を期待させるものとなっており, 沖縄地理学会論文賞にふさわしいものと判断される。



「論文賞」を受賞する渡久地 健氏(右), 高橋そよ氏(右)



渡久地氏, 小川会長, 高橋氏

● 名誉会員の推薦

沖縄地理学会の評議員会において、沖縄地理学会の会則に則り、委員間で慎重に検討・審議した結果、対象となる全議員の中から、下記の 4 会員を付記した理由により、名誉会員候補者として推薦され、本総会において名誉会員が決定された。

沖縄地理学会会則

第二章 会員

第 7 条 3 名誉会員は本会に対し功績があったことが認められ、評議員会で推薦し総会の決議をもって推薦された者で、本人の承諾をもってなるものとする。

堂前 亮平会員を沖縄地理学会名誉会員へ推薦する

堂前亮平氏は、1982 年沖縄地理学会設立からのメンバーで、これまで沖縄県をフィールドに都市地理学、社会地理学の立場から精力的に地域研究を進めてこられた。その研究成果は、1997 年に古今書院から刊行された『沖縄の都市空間』に集約される。この書籍は 1997 年に第 25 回伊波普猷賞、1998 年には日本都市学会賞（奥井復太郎記念賞）を受賞され、各方面で高い評価を受けている。また、これらの研究成果は、本学会大会や会誌『沖縄地理』でも発表されてきた。

そのほか堂前氏の研究業績では、沖縄国際大学南島文化研究所の共同売店に関する総合的研究(1984～85 年)、『沖縄の地理』（新星図書出版、故・琉球大学中山満教授との共著、1983 年）、科研費による『中国長江流域の総合研究』

（大明堂、代表立正大学内山幸久名誉教授 2001 年）、『日本の地誌 10 九州・沖縄』（朝倉書店、2012 年）の監修などがある。

堂前氏は、1944 年、岐阜県高山市の出身である。立正大学を 1963 年に卒業され、その後、立正大学大学院文学研究科地理学専攻の修士課程・博士課程に進学、立正大学助手をへて、1976 年に当時の指導教授であった青野寿郎教授から文学博士の学位が授与された。1977 年に沖縄国際大学教養部に着任し、16 年間にわたって、地理学の立場からの研究や大学教育を通じて人材育成に携わった。とりわけ、多くの中学、高校の社会科教員を育てられ、その教え子たちは現在、県内の中学、高校の学校現場で活躍している。

1992 年に久留米大学文学部（教授）に異動後も文学部長、日本都市学会会長、立正地理学会会長など大学運営や学会活動などでも活躍

されている。2014 年には、久留米大学をご退職、久留米大学名誉教授になられている（2018 年度まで特任教授を併任）。

以上のように、堂前氏の本学会への貢献と、沖縄の地理学分野の研究および人材育成に対する功績により、同氏を本学会の名誉会員に推薦する。

2017 年 7 月 21 日 小川 護

西川 治会員を沖縄地理学会名誉会員に推薦する

西川 治氏は、戦後、旧制の東京帝国大学理学部地理学科を卒業後、東京大学理学部地理学教室の助手、同大学教養学部助教授・教授を務め、1986 年に定年退官し、名誉教授となっている。その後、1996 年まで、立正大学教授も務められた。また立正大学在職中に日本地理学会会長の要職につき、日本地理学界の発展に大きな貢献をしている。現在、日本地理学会名誉会員である。

西川氏と沖縄地理学会との関わりを挙げると、2002 年に開催された沖縄地理学会 20 周年記念大会において、「半世紀余の地理学反省記—地理教育と地域行政への関与を含めて—」と題し、基調講演を行っている。

その講演の中で、恩師の辻村太郎のエピソードとともに、1970 年刊行の『日本の文化地理』（講談社）の編集に関わった仲松弥秀との邂逅についても述べている。辻村太郎は、『神と村』に代表される仲松弥秀の村落・文化地理学研究に大きな影響を与えた人物であり、西川氏は、戦前の仲松弥秀と辻村太郎の関係を知る、数少ない地理学研究者である。

その他に西川氏は、1963 年 7 月～8 月にかけて、文部省派遣講習講師団の一人として沖縄を訪問し、県内各地で教員向けの集中講義を行い、沖縄の社会科・地理教育の普及にも努めている。以来、今年 92 歳となった西川氏は、現在も沖縄の地理教育に関心を持ち続けている。

以上のように、西川氏のこれまでの沖縄の地理学・地理教育への貢献に対し、同氏を本学会の名誉会員に推薦する。

2017 年 7 月 21 日 崎浜 靖

前門 晃会員を沖縄地理学会名誉会員に推薦する

前門 晃氏は、長年にわたり、琉球大学教養部および法文学部において自然地理学、中でも地形学や島嶼環境を基礎とした研究と教育に従事してきた。この間、多くの著書、論文、報告書を執筆し、優れた業績を挙げるとともに、多くの人材育成に貢献した。2017 年 3 月に琉球大学を定年により退職され名誉教授を授与されている。

前門氏のご専門は、自然地理学、特に地形学である。中でも、岩石の風化、マスマーブメント、地形と岩石物性との関係といったいわゆる地形プロセス学の研究を中心にされている。また、沖縄の亜熱帯的特徴を生かした研究、島嶼地域の自然環境の課題などといった、ご自分のご専門を生かしつつ、地理学の特徴である学際的研究も数多くされている。また、先生は、自然地理学のみならず、他分野の多くの先生との科研を中心とした共同研究に関わってきている。それは地理学の強みであるからという理由とともに、先生のお力が必要とされてきたからである。また、専門知識をもつ有識者として、沖縄県および県内市町村の様々な委員も務められてきている。特に、沖縄県環境影響評価審査会の委員としては、辺野古埋立ての環境アセスメント結果の不備へ苦言を呈するなど、沖縄の基地問題、環境問題への貢献もされている。

沖縄地理学会では、設立当初からの会員で会員歴 35 年、その間、幹事、評議員、会長 6 年の役職を歴任した。特に、初期の会報・会誌の編集などに携わり、また、英語での論文を投稿されるなど、地方学会だからといわれないう、学会の質を向上される努力をされてきた。また、

30 周年シンポジウムや 30 周年を記念しての学会ロゴマークの制定などは、当時会長の前門氏の功績が大きい。沖縄地理学会は今年で 35 周年を迎えることになるが、これも前門氏のこれまでの沖縄地理学会への尽力によることが大きい。

以上の功績により、前門氏を本会の名誉会員候補者として推薦する。

2017 年 7 月 21 日 廣瀬 孝

目崎 茂和氏を沖縄地理学会名誉会員へ推薦する

目崎茂和氏（三重大学名誉教授）は、沖縄地理学会設立の発起人の一人であり、設立当初から今日まで約 35 年間、本会会員であり続けている。目崎氏は、1975 年 4 月に琉球大学に赴任し、1986 年 4 月に三重大学に異動するまでの 11 年間、沖縄の地にあつて、沖縄の自然地理学研究の基盤づくりと、人材育成において大きく貢献してきた。

研究面では、島の地形、サンゴ礁海岸地形、

風水の研究において顕著は業績を生んだ。その代表的な著書として、『琉球弧をさぐる』（1985, 沖縄あき書房, 単著）、『南島の地形』（1988, 沖縄出版, 単著）、『石垣島白保 サンゴの海』（1988, 高文研, 小橋川共男との共編）、『石垣島のサンゴ礁環境』（1991, WWF 世界自然保護協会, 監修）、『琉球の風水土』（1984, 筑地書館, 木崎甲子郎との共著）、『図説 風水学』（1998, 東京書籍, 単著）などがある。

人材育成の面では、現在本学会で活躍の自然地理学分野の研究者の多くが目崎氏の薫陶を受けてきたことがあげられる。研究者の育成に限らず、県庁や市町村で活躍中の職員（あるいは活躍した職員）の育成に尽力された。

目崎氏は、三重大学、南山大学に移ってからも、世界的な視野から沖縄の地理学研究を鼓舞し続け、本学会大会でも何度も研究発表を行ってきた。

以上の、目崎氏の本学会への貢献と、沖縄の地理学分野の研究と人材育成に対する功績により、同氏を本学会の名誉会員に推薦する。

2017 年 7 月 21 日 渡久地 健

● 2017 年度例会報告

● 去る 2017 年 8 月 25 日（金）、午後 2 時 40 分～4 時 10 分、沖縄国際大学 13 号館 1 階研究所会議室において、沖縄国際大学沖縄経済環境研究所研究会との共催で、「離島における観光の可能性と限界—宮古島の事例を中心として—」というテーマのもと、2017 年度第 1 回目の例会が開催された。比屋根良直氏（沖縄国際大学沖縄経済環境研究所研究支援助手）が司会進行を担当し、沖縄国際大学沖縄経済環境研究所の名嘉座元一所長と沖縄地理学会の小川 護会長の挨拶の後、発表が行われた。発表の後、偏る経済効果の仕組みや受け入れ能力（キャパシティ）などの多くの質問があり、活発な議論が行われた。なお、発表者による発表内容は以下の通りである。

「離島における観光の可能性と限界—宮古島の事例を中心として—」（報告：助重 雄久）

近年、沖縄本島以外の中核離島には多くの観光客が訪れるようになっていく。とくに宮古島では 2015 年の伊良部大橋開通を機に観光客が急増し、2000 年代半ばから年間 40 万人前後で

推移していた観光入込客数が、2016 年度には 70 万人に到達した。これに伴い、本土の空港と宮古を結ぶ直行便の就航やリゾートホテルの新設も相次いでいる。

しかし、宮古－那覇間の航空便は便数や機材が限られるため、既に輸送力の限界に近づいており、島民が急用で島外に行きたくても満席で搭乗できない、旅客手荷物が多い時期には島の特産物の移出や生活物資の移入にも支障が出る、といった状況が生じている。また、宮古島市が促進している外国クルーズ船の誘致は観光客の入込数を大きく押し上げている。しかし、クルーズ船は午前中に入港し、夕方には出港してしまうため、入島した外国人によって経済的に潤うのはレンタカー、バス、大型商業施設など特定の業者に限られ、宿泊施設や島内の人々が経営する一般商店は経済的なメリットが得られない。

観光客の増加は島内での雇用を創出すると

ともに、多くの人を雇う外部資本の量販店やホテルの進出が島内の賃金水準を引き上げている。しかし人件費の上昇は、地元の企業の経営を圧迫することにもなっている。

また、リゾートホテルの建設ラッシュは、生コンクリートのなどの建築資材の不足や高騰につながり、一般住宅が新築できなくなる事態も起きている。また、宿泊施設の収容能力が急増することで、水需要やゴミの増加も懸念される。以上で述べたように、島という限られた空間は利用できる資源や人材、交通手段も限られている。これらの能力を超えた観光誘致を行えば、必ず「反作用」が生じ、島民の生活や島の観光の「セールスポイント」である美しい自然環境への悪影響が顕在化する恐れもある。



発表者の助重氏



例会風景



挨拶をする小川会長



参加者からの質問



助重氏(中央)と参加者

『沖縄地理』第18号(2018年6月30日発行予定)原稿募集

- 1) 原稿締切： 2018年3月31日(土) 必着
- 2) 原稿の種類： 論説／研究ノート／授業実践報告／資料／書評／フォーラム
- 3) 投稿規定・執筆要領： 『沖縄地理』第17号末尾と沖縄地理学会ホームページに掲載
- 4) 送付先： 〒903-0213 沖縄県西原町字千原1番地
琉球大学法文学部地理学教室(廣瀬 孝気付) 沖縄地理学会編集委員会

●原稿募集／会員が関わった刊行物の情報提供のお願い

本紙のコラム「一枚の図で語る地理トピック」(図または写真 1 点, 文字原稿 1200～1600 字程度)と「FIELD NOTES」(原則文字原稿のみ 800～1200 字程度)を募集いたします。次号は 5 月頃発行を予定していますので, 4 月末までにご投稿ください。また, 本紙では会員が関わった刊行物を紹介しますので, 書誌情報をご提供くださいますようお願いいたします。

●新入会員

<正会員>

佐久真 沙也加, 助重 雄久, 肖 鋌, 羽田 麻美

活動日誌(2017 年 7 月～2017 年 12 月)

▼2017/07/03(月) 2017 年度第 1 回表彰委員会(琉球大学法文学部研究棟 209 室, 19:40～20:00) 議題:①表彰委員長の選出, ②幹事会から推薦のあった論文賞 1 件を審議。なお, 奨励賞とポスター賞は該当者なし。

▼2017/07/14(金) 2016 年度第 6 回幹事会(琉球大学法文学部研究棟 209 室, 18:30～19:30) 議題:①会務の報告, ②2017 年度大会・総会について③表彰委員会について, ④その他

▼2017/07/21(金) 2016 年度沖縄地理学会評議員会(琉球大学法文学部研究棟 211 室, 18:30～20:30) 議題:①2016 年度の事業報告・決算, ②学会員の入会, ③2017 年度の事業計画・予算, ④沖縄地理学会賞表彰について

▼2017/07/29(土) 2017 年度沖縄地理学会大会・総会

▼2017/11/06(月) 2017 年度第 1 回幹事会(琉球大学法文学部研究棟 209 室, 19:00～19:30) 議題:①会務の報告, ②その他

編集後記 本号も, なかなか編集作業が進まず, 発行が遅れてしまいました。会長はじめ多くの方にご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げます。▼今回の大会での口頭発表では, 座長を務めたこともあり, 口頭発表の最初の 3 名の方の写真を撮ることをできず, 本号ではその写真を掲載できなかった。本当に申し訳ありませんでした。▼今回の会報では, シンポジウムの詳細や名誉会員の推薦文を掲載したこともあり, 「一枚の図で語る地理トピック」と「FIELD NOTES」というコラムを依頼せず, 掲載をしなかった。次号(68 号)は 2018 年 5 月 30 日発行の予定ですので, 多くの方がコラムの原稿をお寄せ頂けると嬉しく思います。▼例会の小川会長の写真と集合写真は沖縄国際大学沖縄経済環境研究所から頂いた。厚くお礼申し上げます。▼今号も小川 護会長と渡久地 健さんにご高閲(校正)をお願いしました。ありがとうございました(上江洲)

2016年度「沖縄地理学会」決算書(案)

項目	予算額	決算額	備考
収入			
1.会費	289,800	231,000	
2.前年度繰越	143,216	143,216	
3.寄付金	1,000	300,000	前門前会長より
4.利子・その他	50,000	39,153	*1
5.前年度会誌発行等積立費	200,000	200,000	*2
収入合計	684,016	913,369	
支出			
1.会誌発行等積立費	200,000	200,000	*3
2.会誌発行費	300,000	205,200	
3.会報発行費	10,000	0	
4.通信費	70,000	105,408	*4
5.集会費	20,000	4,569	
6.謝礼金等	40,000	34,500	
7.雑費	20,000	8,356	
8.予備費	24,016	0	
支出合計	684,016	558,033	

収入合計 913,369
支出合計 558,033
次年度繰越額 355,336

*1 貯金利子(4円), 会誌販売4,000円, 立正地理学会補助金(2012年)35,000円, 懇親会つり149円

*2 会誌発行等のための積立金が2015年度予算から入金された(2016.7.1)

*3 会誌発行等のための積立金が2017年度予算へ支出された(2017.6.30)

*4 ホームページ代含む(サーバーレンタル代1,543円)

※ 2016年度は2016.7.1～2017.6.30

2017年度「沖縄地理学会」予算(案)

項目	予算額	前年度予算額
収入		
1.会費	296,100	289,800 *1
2.前年度繰越	355,336	143,216
3.寄付金	1,000	1,000
4.利子・その他	50,000	50,000
5.前年度会誌発行等積立費	200,000	200,000 *2
収入合計	902,436	684,016
支出		
1.会誌発行等積立費	200,000	200,000 *3
2.会誌発行費	300,000	300,000
3.会報発行費	10,000	10,000
4.通信費	80,000	70,000
5.集会費	20,000	20,000
6.謝礼金等	40,000	40,000
7.雑費	20,000	20,000
8.予備費	232,436	24,016
支出合計	902,436	684,016

*1 (3,000円×141名)×70%

*2 会誌発行等のための積立金が2016年度予算から入金される(2017.7.1)

*3 会誌発行等のための積立金が2018年度予算へ支出される(2018.6.30予定)

会員数 146名(うち名誉会員5名)

■役員(50 音順, 敬称略, *印は幹事)

会長:小川 護(1期目)

評議員:上江洲 薫*, 尾方隆幸, 崎浜 靖*, 下里 潤, 田代 豊*, 渡久地 健*, 仲田邦彦, 中村謙太, 花木 宏直*, 廣瀬 孝*, 町田 宗博, 宮内 久光*, 森山 靖, 渡邊 康志*

監査:稲福 政樹, 我那覇 念

※評議員の田代 豊会員が新たに幹事となった。